
Brave man or Clown

未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brave man or Clown

【Nコード】

N5241Y

【作者名】

未来

【あらすじ】

Flower and Fairyの続編。

小さな森を出て見つけた静かすぎる森。そこでリリイは消えた実体を取り戻すために眠りについた。数十年後に目覚めたリリイが出会った青年は自称勇者だった。ある目的の為にその青年と行動するがどこか森の様子がおかしい。真実に気づいた時、既に物語は終わりを告げていた。

たくさんの自然が生きる北の森に灰色の鎧を身に纏った青年と思われる男が金色の大剣を左手に、もう片方の手には血塗れの真つ黒な狼を引きずりながらゆっくりと歩いていた。

鎧独特の音を立てながら茶色のブーツで濡れた大地を踏みしめ、ただ歩く。

雨が降ったのか、所々に水溜まりが出来ている。
透き通った水面に写るのは青く、白い空。

隙間なく生えている葉のない木々によって作られた影が森全体をひんやりとさせる。

「……誰ですか？」

何かの気配を感じ、背後に向かって語り掛ける。
その声は低く、堂々としていた。

だが、足を止めずにゆっくりと規則正しく歩く青年。

「尾行されているのは分かっています。危害を加えるつもりはありません。出てきなさい」

あくまで下手に自分が交戦的ではないことを伝える。

しかし、どこか威厳がある声音。

人の気配も動物の気配も感じられない森は小鳥のさえずりさえ聞こえない。

青年はなかなか姿を現さない何かに苛立ちを感じていた。

ドサリ。音を立てて赤黒い狼を草花の上に落とす。

突然静かな森に響いた金属音。

「……強引ね」

「すみません。気が短いもので」

何かの正体は人間のような容姿をした幼さが残る少女だった。

白く、細い手には似合わないサバイバルナイフ。青年が振るったであろう大剣を器用に受け止めている。

青年は素早く大剣を下ろし、座り込んでいる少女に手を差し伸べた。

「道に迷った……ようではなさそうですね。この森の守護霊でしょうか？」

大剣で斬り掛かれたのにもかかわらず、少女は素直に青年の手を取り、優雅に立ち上がった。

「守護霊？違うわ。私はリリィ。ある森で生まれた妖精よ。数年前にこの森で眠りに就いたの」

「妖精、ですか。すみません。僕の故郷では森で生まれた者を守護霊と呼んでいたもので。最近目覚めたのですか？」

「そうよ。実体を取り戻す為にこの森の命をお借りしたの。数年前と姿が変わらないのが残念だわ」

「そうですか。今のままでも十分美しいですよ」

自らを妖精と主張し、リリィと名乗る少女。
それに対し、紳士のように振る舞う青年。

木々の隙間からこぼれた太陽の光が金色の大剣に反射し、既に息絶えたであろう赤黒い狼を不気味に照らす。

一瞬、狼を瞳に捕えた。

眉を潜め、顔を曇らせるリリイ。

「僕はルジュ・ソムティーズ。この名を知る者はみな、僕を勇者と呼びます」

リリイの変化を無視し、笑みを浮かべて自己紹介をする青年。

エメラルドグリーンの髪が綺麗な顔を引き立てている。

やわらかい笑みとは対照的にひどく冷たい口調。

「貴女の目的は何ですか？」

栗色の柔らかい髪が目立つ美しい少女、リリイの首元には大剣。

少しでも気を抜けばそのか細い首筋に鋭い刃が容赦なく皮膚を斬り裂くだろう。

「本当に気が短いね。この大きな剣はそこに横たわる“魔物”が斬れるようね？」

生きるか死ぬかの恐怖の中でリリイは微笑んでいた。
死ぬことを恐れていないのか、平然と質問を質問で返す。

「そうですよ。この大剣は対“魔物”用に作られた勇者の為にある武器です。実体の掴めない“魔物”が斬れるということは実体がない“妖精”も斬れます」

「あら、私も殺す気なの？その魔物のように？」

「女性を手にかけるのは気が進みませんが、僕の目的を邪魔するようでしたら……殺します」

青年の灰色の瞳が少女の青い瞳を射ぬく。

口元は笑っている。だが、灰色の瞳は敵を見るかのように冷たく、鋭い。

「私の目的はこの森に城を持つ魔王、グランフィールドに会うこと。それだけよ。貴男に近づいたのは貴男を利用しようと思ったから……これでいいかしら？」

「残念ながらグランフィールドという魔王は亡くなっています。僕の父が数年前に殺しました。利用、とは僕を味方にして魔王を殺してもらったのですか？安心して下さい。僕はこれから魔王一家を殺し

に行くつもりです。現に魔王の息子、フィールドが新たな魔王となりました。フィールドは貴女くらいの少年です。子供を殺すのは心が痛みますが仕方ありません。世界が望んだことですから」

ルジエは淡々と恐ろしいことを丁寧に語った。

未だ大剣を向けられているリリィは身動き一つとろうとしない。

再び静まり返った森。

左右どこを見渡しても見えない出口。森はゆっくりと闇に染まってゆく。

「で、私を殺すのかしら？それとも……」

ゆつくりと少女の身体が傾く。
それにいち早く反応した青年。

大剣を素早く下ろし、空いた左手で空気のような軽さの身体を受け止める。

自然と共に生きる少女のような妖精、リリィ。

朝日と共に起きて、闇と共に眠りに就く。生まれから今までずっと続けてきたリリィにとって当たり前前の生活は勇者、ルジエには理解出来ない。

「警戒心がない妖精ですね。敵か味方が分からない男の前で眠ってしまうなんて。僕は勇者。無駄な殺生はしません」

少し困ったように眉をひそめ、リリィを肩に担ぐ。

大剣を背中に背負っていた鞘に納めて元来た道をゆつくりと歩き出す。

赤黒い狼は闇に紛れ、姿は見えない。生き物の気配が無い森の夜は

不気味で恐ろしいものだっただ。

時折雲から顔を覗かせ森を照らす月。月明かりに照らされた葉のな
い木々はまるで墓石のよう。

魔王、グランフィルドの城からはこの広く不気味な森を一望するこ
とが出来た。

「……勇者ソムティーズ。あなたの自慢の息子がやっといらっしや
たわよ。ずいぶんと図々しい子に育ったようね。自分の異変に気付
かないなんて哀れな」

「……………」

漆黒で露出度の高いドレスを身にまとった美しく、気高い女性はテ
ラスから身を乗り出し楽しそうに呟いた。夜風に吹かれ時折揺れる
紫の髪を銀色の髪飾りで一つに結び上げ小さく微笑む。

女性の隣には興味なさそうに森を眺める無表情な少年が一人。

灰色の髪を特徴とした少年は直ぐに薄暗い城内へと姿を消してしま
った。

「少しくらいは興味を持ちなさいよ。流石あの人の息子ね。私とグ
ランフィルドにそっくりだわ……小さな魔王、フィルド」

不満そうに唇を尖らせる女性もゆっくりと城内へと消えてしまった。

木々の隙間からうつすらと太陽の光が届く。

ゆつくりと太陽が空を昇る中、リリイは目を覚ました。

「おはようございます。早いお目覚めですね」

背後から気配もなく現れたルジエは昨晚と変わらない笑顔で挨拶をする。

「おはよう。私は自然と共に生きているの。あなたは寝ていないのかしら？」

「魔王の敷地内で仮眠をとるわけにはいきません。いつ魔物が襲ってくるか分からないので」

朝日に照らされる森は月明かりより綺麗に光っていた。

葉のない木は冷たい風に揺られて踊っている。

ルジエはリリイにかけていた焦げ茶色のローブをそっと取り上げ、羽織った。

一晩中身に付けていたのか、鎧がかちゃかちゃと音を立てる。

「そろそろ出発しましょう。朝食はどうします？」

「そうね。闇の城はここからどれくらいかかるのかしら？私は自然そのものを食としているから平気よ」

森の真ん中にそびえ立つ黒い城。名はない。

人々は魔王が住む城を闇の城と呼ぶ。

葉の無い木々が生えている森のどこからでも城が見えるが森は広く、障害物を避けて城まで五日程かかる。

「そうですか。うらやましいですね。僕は人間ですので自然は食えません。後、二日程でしょうか。僕が森に入ったのが三日前ですから」

ルジユは柔らかい笑みを浮かべ、闇の城を見上げるように眺めた。

城は塔のように高く、雲がかかっており、全体を見ることが出来ない。

雲は真つ白ではなく灰色で時折雷を光らせる。この様子だともう時期雨が降るだろう。

「結構かかるのね……城は目と鼻の先にあるのに。貴男、魔法は使えないの？」

「移転魔法ですか、残念ですが今は使えません。先へ急ぎましょうか」

一瞬悲しげに笑みを緩めたルジュはリリイに背を向けて歩きだす。それに続いてリリイは乾いた地面から体を少しだけ離し、ゆっくりと飛んだ。

自称勇者と妖精が歩き始めて半日。
時刻はお昼過ぎ。

降りそうで降らなかった雨は突然大雨となり、二人に降り注いだ。空では休む間もなく雷が鳴り響いている。

「嫌だわ。雨よ」

「そうですね。どうかしましたか？」

先ほどまで低く飛んでいたリリイは素足でぬかるんだ地面に降り立ち、ため息をついた。

その表情は青白く、今にも目蓋を閉じてしまいそうだ。ルジュはリリイに視線を向けることなく歩き続ける。

「羽が濡れるわ。ここから歩きなんて……最悪」

「羽、ですか？」

隣を歩くリリイに向きを変えたルジュ。だが羽などどこにも見えな
い。着ていた焦げ茶色のローブを脱ぎ、そつとリリイの頭から被せ
た。

「待つて。その兎は決して私達を襲わないわ。ただの、」

風の唸り声と共に二人の目の前に表れた大きな陰。
リリイがその正体に気付いた瞬間、その陰は消えていた。

スターラビット

「星兎は流れ星のような早さと高い知能を持っています。魔物に取
付かれるとは……哀れな」

二人の足元には大きな兎の屍。

兎を斬った大剣には真っ黒な血。

かり血を鎧に浴びたルジュは前髪を掻き上げ、冷めた瞳で兎を見下
した。

その背後で悲しそうに顔を地に向け、悔しそうにスカートの裾を握
るリリイ。

この人は何かが違う。心の中で感じた。

「時間の無駄です。先へ急ぎましょう」

まるで何事も無かったように歩き始めるルジュ。急いでいる様子も

なく、焦りも感じられない。

リリイにはルジュが城へ行くのをためらっているようにもみえた。

「あなたは勇者？それとも、」

「愚問ですね。否定も肯定も出来ません。世界が認めても僕は認めていませんから、こんな出来損ないの勇者なんて……」

探るように問いかけた言葉は馬鹿馬鹿しいと遮られ、答えは返ってこない。

絶え間なく降り続ける雨はリリイの頬を伝って涙のように流れ落ちた。

悲しい悲しい哀れな勇者。

魔王を倒して世界の導いた道を歩むか、倒されて哀れな罪人として世界から迫害されるかはこの偽りの勇者次第。

さあ、選びなさい。

自分の庭先を散策するように歩くルジュ。

その背中を無表情で見つめるリリイの瞳には何も写されてはいなかった。

雷が落ちる。

木が朽ちる。

そんな中、表情を変えずに平然と整えられた道を進む両者。

目の前には巨大な門。

黒く、飾り気の無い門の扉は既に開かれており、魔王が城へ招待したように感じられた。

脇目も振らずに迷わず城内へ足を踏み入れるルジュを小走りで追い掛けたリリイ。

最上階へと続く螺旋階段が二人の視界に写る。

上れ、と命令するように雷が鳴り響く。

窓一つ無い城内は薄暗く、ルジュが取り出した蠟燭だけが明かりを灯していた。

カシャン、カッン、カシャン。

空洞な城内に響く鎧の音。

カシャン、カッン、カシャン。

焦るわけでも、ゆっくり進むわけでもない。

この先に進む事が必然なのか、当たり前なのかそれは勇者にしか分からない。

「ようこそ。魔王の城へ」

長い長い階段を上り、たどり着いたのは最上階。

闇の空間を表すかのように広間は真っ黒に染まっていた。

黒く、古い扉。

シミ一つない黒い絨毯。

完全武装した勇者と無防備な妖精を出迎えたのは魔王ではない。

美しく、妖艶な女性が広間の真ん中に立っていた。

露出度の高い真っ黒なドレスを着こなし、右手には扇子を持ち、顔の半分を隠している。

大きな髪飾りが雷の光で二人の視界に写る。

女性が一言発しただけで緊迫した空気が漂う。

心が押しつぶされそうな感覚の中でルジュは笑みを浮かべ、リリイは強い眼差しで女性の背後にそびえ立つ大きな扉を見つめた。

「わたくしは魔王の母、ローザ。息子に何か用かしら？」

「ルジュ」ソムティーズと申します。僕は父である勇者の変わりにあなた方を滅ぼしに来ました。魔王はその扉の中ですね？」

丁寧な言葉遣いとは裏腹に笑顔で目的を躊躇無く告げる勇者。魔王の妻、ローザは音を立てて扇子を閉じると微笑み返した。雷がローザの背後で花の変わりに光をちりばめている。

「魔王はもうどこにもいないわ。ここはわたくしと愛する息子のお城。あなたの求める答えはどこにもない。今すぐお帰りなさい」

「残念ながらご期待には添えられません」

床が、地面が悲鳴を上げた。

足場は大きく揺れ、リリイはその場に崩れ落ちた。

だがそれは単なる幻覚。

二人の異常な殺気によるもの。

睨み合う両者。

決して目を逸らそうとせず、笑みを絶やさない。

雷までも休息をもたらす長い沈黙を破ったのはルジユ。

重たいはずの鎧を着込んだまま軽やかにローザの背後に回り込む。

ローザは振り向く事もせず、片手を挙げて大剣を振り上げたルジユの目の前に魔方阵を作り、吹き飛ばした。

魔方阵から放たれたのは突風。

リーブランド

「竜の息」

「ぐっ!？」

受け身を取る間もなく床に叩きつけられたルジュ。
その鎧に黒い影が写った。

ローザだ。驚く相手に容赦なく同じ攻撃を加える。

「うおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

鼓膜が破けそうな叫び声をあげて起き上がる。衝撃を避けるために
大剣を振りかざし、迫りくる竜巻に突っ込んだ。

広い広間一面を駆け巡る風がローザとリリイを取り巻く。

ルジュが竜巻を大剣の横面を利用し、振り払ったのだ。

嵐のような風に絶えきれず、宙に浮かんだリリイに対し、何事も無
かったように動かないローザ。

息を切らして立ち尽くす勇者。

その瞳は虚ろで焦点が合っていない。

リリイはゆっくりと絨毯に降り立ち、扉に向かって歩み始めた。

その様子を止めるわけでもなく、黙って見つめるローザ。

二人がすれ違う時、川の流れが変わったように緊迫した空気が消え
て和やかな雰囲気変わった。

「私はあなた達の味方でも敵でもないわ。ただ、この哀れな人間達
を救いに来たの」

優しく笑みを浮かべたリリイ。

ルジュの前にたどり着くと扉の向こうに潜む何者かに話し掛けた。

「出て来なさい。これ以上戦っても無意味だわ。種明かしの時間にしなしょう?」

ゆつくりと開く大きな扉。

リリイと同じくらいの身長をした無愛想な少年が姿を現した。

人間にしては珍しい灰色の髪と瞳を持つ、ただの少年に見える。

その姿を瞳に捕えたルジュは殺気を顕にし、今にも飛び掛かりそう
だ。

「やっと姿を見せましたか。新たな魔王ッ!」

ダークサウンド

「闇雷雨」

少年に向かって振り上げられた大剣は少年による魔法で呆気なく飛ばされてしまった。

黒い雷の光がいくつもルジュに襲い掛かり、大剣が宙を舞う。

偶然か否かりリイが伸ばした手には大剣が収まった。

無言でルジュの心臓に大剣を向けたリリイ。

目をつぶり、大きく空気を吸い込むと再び目を開く。

「目を覚まして。あなたはもう死んでいるの。ルジュ＝ソムティーズのお父さん」

「な、にを言っている？」

「あら、自覚ないの？落ちこぼれの思い込み勇者さん。言っただじゃない、あなたは死んでいるって」

リリイの言葉に困惑する三人。

勇者の面影は薄れ、ただの青年に戻りつつあるルジュ。

魔王の母と名乗り、我が子を守るために立ちはだかった強く凛々しい女性、ローザ。

世界にも人間にも興味を持たず、父の後を継いだ少年。

「まるで何もかも知っているような口振りね」

「そう。私は全てを知っている。だからここにいるのよ。あなたは小民族、闇竜の生き残りよね」

ルジュから視線を逸らす事なくローザの問い掛けに答える。

ローザは諦めたようにため息を吐き、大人しく話を聞こうと口を閉じた。

少し昔話をしましょう、リリイはにっこりと微笑み語り始めた。

昔、あるところに一人の男がいました。男は何事も努力をせずに権力の力だけで生きていました。

村の人々は男を恐れ、憎み、復讐しようと動き出します。

「ヤツを生かしておくな。今すぐ殺すんだ」

村長の一言で男の一族を殺そうと家に取り込み、使用人や家族が次々と消される中で一人の少年だけが生き残りました。少年を助けたのは隣の村に住む少数民族の長の妻でした。

男は目の前で家族を殺され、焼け死ぬまですつと「許さない」と呟いていました。悲しいことに村人にしてきた酷い仕打ちを忘れ、不幸なのは自分だと思い込んだ男は魂だけが残り、生き残った少年に取り付いて一つの村を潰してしまします。

村人を人間を無差別に殺す魔物に仕立てあげ、それを倒した男は自らを勇者と呼び、この世界で生きるもの全てを魔物という敵にして

しまいました。

けれどもそれは男が作ったただのシナリオ。

やがて男は魔力が少し強いだけの少民族を魔王の一族と決めつけ、一族の住む村を焼き払ってしまいました。

魔王の一族を潰したことで男は完全に世界が自分中心に回っている
と思います。

魔王と決めつけられた一族の長は少年の姿をした男と戦う事は出来
ませんでした。

女、子供に甘い長は少年を助きたい一心で油断をしてしまい助けた
かった少年に殺されてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241y/>

Brave man or Clown

2011年12月21日20時54分発行